

「富士下山」

近野 巖

ことの起こりは、話はずむお酒の席で、いつにも増して元氣を出した筆者の提案だったらしい。「らしい」というのも、本人の記憶は定かでないのだが、その後の成り行きからは、主役の一人となった筆者が、いい出しっぺであることは想像がつくからだ。

去年の正月か、花見の春のどちらかだったろう。新しく家族に加わっていた、お嫁さんの実家を御殿場に訪ねて歓談した折のことである。白雪に、午後の陽をいっぱいに浴びて光る富士の秀麗なたたずまいが、足元に近いところから望むだけに一層心にしみ、夏の富士登山を氣安くアピールするところまで話が進んだものらしい。

国内最高峰でありながら、いつでも行ける

足の便。整備されている登山道、休憩・宿泊施設とともに、毎年数十万人の老若を受け入れてくれる親しみやすさが、ついつい氣樂に登れる「觀光地」と誤解させるのもムリないのだが、筆者も恥ずかしながら、そんな氣分に染まっていたことは否めない。五合目まで觀光バスでいけるのだから、足腰になんとか自信の残っている「現役」のうち、子どもころからの宿題を果たしておこう——といった程度の氣軽な思いつきであったに違いない。

——というわけで、夏も盛りのシーズン到来のある日、具体的な日程選択とともに、電話でのお問い合わせいただいた時は、正直いっていささかあわてふためいたのが実態だった。なんと、いって、小学生のころから暗記の対

象だった「ミナナム」(三七七六メートル)の「登山」である。こちらはタガがゆるんだままサボリっ放しの骨と筋肉、という当たり前過ぎる事実を、にわかには心細く自覚し、「大丈夫かなあ」と、わが家のパートナーともども、互いに問いかけ合っていたらくともなかった。

だが、持つべきは頼もしくも勝手知ったる親戚であった。そんな当方の、頼りない事情は先刻ご承知のうえ「登りはブルドーザーに便乗させてもらう」段取りだという。

頂上までの山小屋などに、宿泊客用も含めて大量の生活資材を運び上げるブルドーザーが、お盆を過ぎてシーズンも一段落すると、余ったスペースに、荷物と混載で乗せてくれる。つまり「富士下山」をしたらどうだ、との、優しいおすすりである。そこまで面倒を見ていただいては否も応もあるはずがない。ただご好意に甘えることとなった。

八月下旬、相次いでやって来た小型の夏台風も、私達の「志」をくんでか「下界はくもり空でも山頂は間違いない晴れ」と保証つきのまずまずの「登山」日和。「軽装でいいが一応晴雨兼用の備えを」とあらかじめ助言さ

れたわれらのいでたちは、長くご無沙汰していたスキーのヤッケと、子どもたちが学生時代に使ったまま休眠していたスポーツシューズ。そのリリシさはご想像いただくことにして、同行は、わが夫婦に、お嫁さんとご母堂（といつても筆者のバートナーより二歳お若い）。ということは、男性は、夏期休暇をとっていた筆者一人ではないか！ イザという時を思えば、オトコとして心引き締まる出立となった。

その昔から霊峰として信仰の対象でもあり続けているおヤマには、甚だしい失礼を心中お詫びし続けながら、ブルに揺られること約四時間。預託された荷を降ろして行く間の小休止を除けば、ひたすらキャタピラーの轟音と振動に委ねて待った富士山頂は「風向西風速二・七メートル/秒 気温六・七度C 気圧六四八・六ミリバール 天気快晴」（富士山頂測候所の掲示）の申し分ない状態。周囲を見渡す好位置にある休憩ベンチや記念品売場に若い人や家族連れが群れているのは当然として、アジア系・欧米系を含めた外国人の姿が多いのに、改めて「フジヤマ」の人氣と、日本の国際化を納得する情景であった。

山が好きで、信州の観光地で料理人をした

がら、めぼしい山をほとんど踏破した末、富士にほれ込み、とうとう山小屋の案内人に転じたという、大ベテランに導かれながら一周した約四キロの山頂は、さすがに、かつての大火山。ちょっととした小高い斜面の登りにも心臓の酸欠を感じる人間の小ささを痛いほど思い知らせてくれる。有名な大沢くずれを見おろす、狭い岩場では、ゼミの学生数人を率いて、崩落防止に役立てようと北海道のハイマツの苗木の移植作業に取り組む沖縄の学者に出会って脱帽した。二年目になるが、あと数年は研究を重ねるといふ。ヤワなこちらが恥ずかしくもなる。

「下も晴れてればこちらには日本アルプスが見渡せるのだが」と指さされた山頂からの視界は、ただ一面の白い雲海。日ごろの精進ぶりに照らせば、これでもありがたい極みというべきだろう。こちらの弱脚四人に合わせにくれたのか、ジツクリと歩き回って下山にかかったのは、日の長い夏とはいえ、やがて四時に近いころとなった。健脚の案内さんは、下山の道順を口頭でざっと説明したうえ「三時間ぐらいで五合目に着きますよ」とあっさりたまう。「とすると夕方七時か——暮れるのが早い山道であることにいささか不安

を予感したのが結局大当たりとなった。

つづら折りの正規の下山道から、途中でブルドーザー道に移り、少しでも時間を短縮しようと思ったのが大変な計算違い。ブルドーザーが力づくで開いた専用道は、人間の足にはガレキと砂の道同然。山小屋をたどることもないから人と行き交うこともない。ささの株の間をただ下るだけの、ひたすら転び、滑り、シリもち響きの難行となった。日は暮れ、月明かりもまた相憎なし。ただ一人の男性としては先頭に立ってカケ声で互いを元気づけるしか能がない心細さ。とうとう暗ヤミの山道を登山杖で確かめながら下る。にわか座頭市「を演ずる始末となった。五合目の駐車場の一隅で火花を楽しむ一団がいなければ、さらに下界の灯りを頼りに「下山」し続ける破目になったかも知れない。

となれば、見出しは「富士山を甘く見た無謀登山（いや「下山」か）。行きはよいよい、帰りはチョッピリこわい」「冒険」も経験できたスリル満点の一六キロメートルではあったが、八月三十一日付新聞の社会面には「富士登山6人目の死者 7・8合目急性心不全 皆40歳以上」の見出しが目をむいていた。「富士下山」がやはり分相応であった。